



蠣崎松濤詩集『松濤詩草』訳注 其九

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学函館人文学会 公開日: 2026-03-23 キーワード: 漢詩, 蠣崎文書, 松濤詩草, 松前藩, Chinese traditional poetry, Kakizaki family ancient documents, Kakizaki Shoto poetry collection "Shoto Shiso", Matsumae domain 作成者: 泊, 功 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000824

蠣崎松濤詩集『松濤詩草』 訳注 其九

泊 功

一. はじめに

函館市中央図書館所蔵「蠣崎文書」中の一書、『松濤詩草』（蠣崎松濤著、全三百三首）の訳注其九である。作者の蠣崎松濤及び本詩集についての梗概は「蠣崎伴茂『松濤詩草』について」（『函館国語』第二八号、二〇一三）、本詩集所載のその他の詩については、本誌既刊号及び『函館工業高等専門学校紀要』に既発表の訳注を参照されたい。今回訳出する二一〇番詩から二四九番詩までは、テキストに残された書き付けによると、すべて癸卯（天保十四年）の年に作られている。作者が二十六歳の時の作品ということになる。また、天保十二年から十四年にかけては、松濤が最も多作だった時代でもある。

詩題下に付された漢字一字は、その詩の韻を示している。また、原文の引用に際しては読みやすさを考慮して通用字体を用い、書き下し文のルビ・送り仮名も現代仮名遣いとす。

二. 二一〇番詩〜二四九番詩までの書き下し文、注釈、通釈

二一〇番 春雨思郷（春雨に郷を思う） 同廿六日御会 微

春夜灯前帰国夢 春夜 灯前 帰国の夢

醒來窓外雨霏霏 醒め来たれば 窓外 雨 霏霏たり

回鴻声閑雲間過 回鴻 声閑かにして雲間を過ぎ

孤客堪哀郷信稀 孤客 哀しみに堪えんや 郷信の稀なるに

（語釈）

○御会：藩主も参加する詩会。○回鴻：北へ帰る白鳥。○堪：詩中では反語の意味で「不可堪」と同じ。

（通釈）

春夜、灯火を前にしてうとうとしながら故郷へ帰る夢を見る。ふと目が覚めると窓の外には雨がしとしと降っている。北へ帰る白鳥が雲間を飛んでいく声が遠くから聞こえてきた。（その声を聞きながら）ひとり旅寝するわたしは、故郷からの便りが少ない切なさに耐えられない。

二一一番 春眠（春眠） 仲春朔日御会 東

抄書 困意朦朧 抄書 眼を困こまりしめて 意は朦朧

日午下簾深院中 日午 簾を下ろす 深院の中

睡味不知春色老 睡味 知らず 春色の老ゆるを

叩門棋敵駭周公 門を叩く棋敵 周公を駭おどかす

（語釈）

○抄書：書物の字句を書き写すこと。○困眼：目が疲れて眠くなること。○深院：喧噪を離れた奥深い森のなかにある建物。○周公：周文王の子で、西周王朝創建の功臣。多くの礼楽制度を確立したとされ、孔子も非常に尊崇した。『論語』（述而）に「甚だしきかな、吾の衰えたるや。久しきかな、吾の復た夢に周公を見ざる」とある。つまり、

周公が夢に出てくるうちは自分の君子の徳は衰えていない。

(通釈)

古書の詩句を書き写しているうちについ眠気が襲ってきた。陽も上がり、この人里離れた別荘も暑くなってきたので簾をおろす。ついでにふと窓の外を見たが、眠気にかまけているうちに、どうやら春の気配も消えつつあることに気づかなかつたようだ。基仲間の門扉を叩く音が周公の夢を見てうとうとしてゐるわたしを起こしてくれた。

二二二番 寄山僧(山僧に寄す) 同月六日御会 微

上人 飛錫各分違 上人 錫を飛ばして 各分かれ違ひ

千里天涯音信稀 千里の天涯 音信 稀なり

別後近來無恙否 別後 近來 恙無きや否や

重能何日扣禪扉 重ねて能く何れの日にか禪扉を叩かん

(語釈)

○飛錫：僧が錫杖を携えて諸国を行脚修行すること。

(通釈)

山寺の上人はすでに錫杖とともに諸国行脚の修行に出られたご様子。互いに会うこともかたません。千里も離れた遠くにいらつしやる身の上では音信を交わすのも容易ではありません。お別れしてから御身にお変わりはありませんか。つぎにわたしが上人の禪門を叩けるのはいつの日になりますことやら。

二二三番 過春村(春の村に過ぎる) 同月十日徽典館宿題 真

引筇到处村村鬧 筇を引きよて到る処 村村 鬧し

風雨隨時不累民 風雨 時に随いて民を累さず

已有寸苗豐熟色 已に寸苗 豐熟の色有り

餉田笑語太平人 餉田 笑語 太平の人

(語釈)

○宿題：詩会の参加者に、前もって詩題が出されていること。○餉田

：『説文解字』に「饁は餉田なり」とあり、饁(餉田)とは田畑で働く人に家族が弁当を運ぶことを言う。

(通釈)

杖をつきながら春の農村を訪れたが、どこも農作業でにぎやかだ。雨風も今年は時宜を得て、農家を悩ませていないようだ。出たばかりの苗もすでに豊作の兆しが見られるのだから。家人が田畑で働く人たちに食事を運んでいるが、そこには笑いながらおしゃべりに興じる平和な人々の姿があつた。

二二四番 詠雪(雪を詠む) 刪

六出漫漫難往還 六出 漫漫として 往還し難く

舞風上下一望間 風に舞つて上下す 一望の間

紛紛散玉如銀界 紛紛として玉と散りて銀界のごとし

俄築窓前盈尺山 俄かに築く 窓前 盈尺の山

(語釈)

○六出：雪の異称。○漫漫：ここでは一面に広がる様子。○盈尺：一尺いっぱいの高さ。

(通釈)

降る雪が外一面を覆い、往来にも支障をきたすほどになった。一望すれば雪の粒が風で上下に舞っているのがわかる。その細かいひと粒ひと粒が入り乱れ、まるで世界が銀色に染まつたかのような。見る間に窓の外には一尺を超えるほどにも積ってしまった。

二二五番 春日漫成(春日漫成) 蕭

童子逍遙遊戯処 童子 逍遙して遊び戯るる処

出門竹馬友相邀 門を出ずる竹馬 友 相邀え

喧嘩忽起春池側 喧嘩 忽ち起る春池の側

心有紙鳶掛柳条 心は紙鳶の柳条に掛かるに有り

(語釈)

○竹馬：竹を股にはさんで馬に見立てる子どもの遊び。○喧嘩：騒がしいこと。○紙鳶：凧。陸游「春日雜興」詩に「紙鳶竹馬 兒の嬉しむを看る」とある。同詩では子どもたちが楽しそうに遊び、家に炊く米があり、役人の横暴がない理想の社会が詠じられる。

(通釈)

子どもたちがぶらぶら好きに遊んでいる。そこに竹馬に跨りながら出てきた子どもを友人たちが出迎える。すると春めいてきた池の辺りが急に騒がしくなった。どうやら子どもたちは柳の枝に引っかかった風が気になっているようだ。

二一六番 春江晚景(春江の晚景) 同月十一日御会 麻

雨後桜桃春色加

雨後の桜桃 春色加わり

行探詩料日西斜

行ゆく詩料を探せば 日 西のかた斜めなり

漁歌声近煙霞裡

漁歌 声は近し 煙霞の裡

兩岸争妍總是花

兩岸 妍を争うは 總是是れ花

(語釈)

○詩料：詩を詠むための題材。

(通釈)

雨が上がったあとの桜や桃の花には、いっそう春のつややかさが加わる。(それにつられて)詩の題材を探し求めてつらつら歩いていくと、すでに日は斜めに傾いていた。すると春霞のなか、急に近くから舟歌の声が聞こえてきた。川の兩岸ではすべての春の花が妍を競っている。

二一七番 春寒花較遅(春寒に花較遅し) 同十六日御会 先

池氷未解鶯難至

池氷 未だ解まずして 鶯 至り難く

淡雪織織二月天

淡雪 織織たり 二月の天

料峭余寒春色緩

料峭の余寒に春色緩く

待花尽日日如年

花を待つこと尽日 日は年のごとし

(語釈)

○織織：多く女性の形容だが、か細く弱々しい様子。○料峭：春風が寒く感じられること。○緩：遅れること。

(通釈)

池の水がまだ融けないようでは鶯の声も聞こえないだろう。まだ細かい淡雪が降る(ここ松前の)二月の空は、春風といってもまだ冷たい。それに春景色の到来も遅れているようだ。きょうは花が咲くのをひねもす待っていたが、この一日はまるで一年のように長く感じられることだ。

二一八番 即事(即事) 侵

過村曳杖独行吟

村を過ぎ杖を曳きて独り行吟す

携酒尋花入遠林

酒を携え花を尋ねて遠林に入れば

留得松間前夜雪

留め得たり 松間 前夜の雪

啼鴉蹴落洒衣音

啼鴉 蹴落して衣を洒う音

(語釈)

※原テキストには承句「花」字の脇に「芳」という書き付けがある。平仄は同じで、意味も大差はない。

(通釈)

○蹴落：蹴り落とす。和製漢語のように見えるが、中国人の詩のなかにもわずかに用例が見られる。清代の女流詩人張佛繡の「曉に起く」詩に「一鳥忽ち驚き飛び 花梢の露を蹴落す」とある。○洒衣：松の枝から落ちて来る雪が着衣を洗っているかのようなこと。

(通釈)

村を通り過ぎて、詩を吟しながらひとり森へと入っていく。酒を腰にくくりつけ、どこかで春の花がもう咲いてはいないかと、遠くに見える木々の間を進むと、松の枝には前夜の雪が積もっていた。(すると人の気配に驚いた)鴉がひと鳴きして飛び立ち、その拍子に落ちてきた雪が我が衣に降り注いだ。

二一九番 少年行（少年行） 同月廿五日徽典館宿題 陽

走馬翩翩楊柳傍 馬を走らせて翩翩 柳楊の傍

青樓少婦若花粧 青樓の少婦 花のごとく粧う

去年百戰竜城外 去年は百戰す 竜城の外

欲曝沙場俠骨香 曝さんと欲す 沙場 俠骨の香

（語釈）

○「少年行」は樂府題の詩で、漢代を想定して遊俠の徒である若者の男氣を描く。○翩翩：姿が粹なさま。得意になるさま。○竜城：匈奴の根拠地。○俠骨香：「俠骨」は遊俠の徒の骨。王維「少年行」四首其二の結句「縦い死すとも猶お俠骨の香しきを聞かしめん」を踏まえる。義のために死を賭して名前を残すこと。

（通釈）

馬を駆つて柳の下を意気揚々と通る。彼の人を待つ妓樓の女性の花の顔。去年は匈奴の城を越えて百戦した。その戦場では俠者の氣骨を思う存分發揮して、名を残そうと戦つたのだ。

二二〇番 美人（美人） 庚

長袖花容対晚晴 長袖 花容 晚晴に對し

淡粧珠翠蕩人情 淡粧 珠翠 人情を蕩かす

少年早察嬌春面 少年 早に察す 嬌春の面

一笑蛾眉能覆城 一笑すれば 蛾眉 能く城を覆す

※原テキストには起句「長袖」、承句「珠翠」にヒ点が付されていて、それぞれ脇に「惱殺」（女性の艶めかしさに心を乱される）、「窈窕」（女性の艶めかしい美しさを言う）という書き付けがある。これらの語でも平仄・句意は通る。ただし、これらの語にも取消線が引かれているため、作者がどちらの語を最終テキストと考えたかは不明である。ここではヒ点を付された当初の表現をとった。

（語釈）

○長袖：歌妓を言う。○晚晴：夕方になって空が晴れること。○珠翠：真珠や翡翠などの装飾品。○嬌春：李賀「浩歌」詩に「嬌春の楊柳 細煙を含む」とあり、美しい春の景色を指す。ここでは美しい女性の形容。○蛾眉：蛾の触角のように細く湾曲した眉毛で、美人の形容。

（通釈）

艶やかな着物を着た美しい歌妓が夕暮れの晴れ間に向かつて佇んでいる。その薄化粧と身に着けた飾りの煌びやかさは、男性の心を動かさずにはおかない。さっそくひとりの若者が氣づいた。彼女が春を思わせるような艶めかしい顔で一笑すれば、一国をも傾けてしまふほどの美しさであったことに。

二二一番 送工藤氏（工藤氏を送る） 二首 其一

東蝦夷クナシリ嶋勤番九郎三衛門也 歌

海山万里幾関河 海山 万里 幾関河

聞説辺城友不多 聞説く 辺城 友 多からずと

祖席莫辞勸杯酒 祖席 辞する莫かれ 杯酒を勸むを

明朝好去慎風波 明朝 好し去れ 風波 慎わん

（語釈）

○九郎三衛門とは、久保泰『松前藩家臣名簿』（二〇二二、私家版）によれば、工藤九郎左衛門のことと思われる。また、同書が参照している史料「御役人諸向勤姓名帳」によれば、九郎左衛門と伴茂は嘉永六年（一八五三）、ともに藩中書院詰めの同僚となっている。○「聞説辺城友不多 祖席莫辞勸杯酒」：それぞれ送別詩の絶唱、王維の「送元二使安西」の結句「西のかた陽関を出づれば故人無からん」、転句「君に勸む 更に尽くせ一杯の酒」を踏まえる。○祖席：送別の宴席。

（通釈）

（君が赴任する国後島にたどり着くには）どれほどの海や山、河や関所を越えなくてはならないのか。その辺境の地には（ともに詩を語れ

るような)友も少ないと聞く。さあ、この送別の宴でわたしの勧めめる一杯の酒を辞さないでくれたまえ。あしたは風や波もおだやかで辺地への船出には絶好の日になるだろうから。

二二三番 其二 尤

送君話罷別離愁 君を送り 話罷みて別離愁う

行役親朋不少留 行役 親朋 少くも留まらず

為祝首途千万里 為に祝る 首途 千万里

明年無恙大刀頭 明年 恙無く 大刀の頭なるを

(語釈)

○首途：旅の門出。○「大刀頭」は刀環のついた大刀。「環」は「還」と同音で「還る」に通ずるため、この語は「帰還」の隠語として使われる。『漢書』(李陵伝)には、匈奴に降伏していた李陵の帰還を促すため、匈奴に遣わされた友人の任立政が「数しは自ら其の刀環を循(な)で、其の足を握り、陰かに之を諭す」と刀環をさすって李陵に帰国を促した故事が記される。

(通釈)

君を見送り、別れの言葉も途切れると、別離の悲しみがこみあげてくる。辺地向かう君も見送る親しい友であるわたしもここに長く留まっていることはできない。だからこの門出に祈ろう。千万里の先の辺地向かう君が来年には無事に松前へ帰ってくることを。

二二三番 花下飲(花下の飲) 灰

繡幕綺羅江水隈 繡幕 綺羅たり 江水の隈

喧喧子女踏青来 喧喧たる子女 踏青に来たる

日斜相映紅粧艶 日 斜めにして相映ず 紅粧の艶なるを

時風花落酒杯 時に風花の酒杯に落つる有り

(語釈)

○隈：川などの屈曲したところ。入り江。○踏青：ピクニック

(通釈)

(外での宴のために)刺繍を施した煌びやかな陣幕を入り江に張ると、若い女性たちがおしゃべりに興しながらここまでピクニックにやってきました。日が傾いて、その女性たちの婀娜なる装いを映し出す。すると、ときおり風に飛んだ花びらが酒杯に落ちて興を添える。

二二四番 春興(春興) 先

雪消山色転娟娟 雪消え 山色 転た娟娟

蜂蝶飞来芳樹辺 蜂蝶 飞来す 芳樹の辺

九十春光一時刻 九十春光 一時に到る

梅桜桃李牡丹天 梅桜 桃李 牡丹の天

(語釈)

○転：ますます ○娟娟：美しいさま ○九十春光：春(一月〜三月の約九十日)のうららかな陽の光

(通釈)

雪が消えて山の色が次第に春らしい美しさを増していく。花の香りを漂わせる樹木には蜂や蝶も集まってくる。春三カ月間のうららかな陽光が一度に降り注いだようだ。(なんといつてもいまの松前は)梅桜桃李に加えて牡丹までが咲き誇る時節なのだ。

二二五番 留別(留別) 寒

河梁勒馬淚欄干 河梁に馬を勒して 欄干に涙す

棧道不難別離難 棧道は難からざるも 別離は難し

莫問今宵何処宿 問う莫かれ 今宵 何れの処に宿らんを

三千里外路漫漫 三千里外 路 漫漫

(語釈)

○留別：旅立つ人が後に残る人に別れを告げること。○河梁：川にかかる橋。匈奴に捕らわれた李陵が、都に帰る蘇武との別れに詠んだ詩として伝わる「蘇武に与う」第二首(『文選』)に「手を携えて河梁に

上る 游子 暮れに何くにか之く」とある。この故事から「河梁之別」(つらい別れ)という語も生まれたことから、別れの地としての歌枕。○勒…手綱を引いて馬を停める。

(通釈)

街はずれの川に架かる橋のたもとで馬を停め、欄干に涙をこぼす。山中の棧道を通るのは困難ではないが、君との別れはつらい。どうか尋ねないでくれたまえ。今夜はどこに宿るのかを。わが行先はここより三千里の果て、道のりはまだまだ果てしないのだから。

二二六番

梅花有紅白兩種予曾未何先開否不知因賦一絶以乞武藤國手之教示(梅花に紅白兩種有り。予曾て未だ何れか先ず開くや否やを知らず。因りて一絶を賦して、以て武藤國手の教示を乞う) 先

寡聞無友乏才賢

寡聞 友無く 才賢に乏し

二十春秋又六年

二十の春秋 又 六年

北地生來多誤節

北地 生來 節を誤ること多し

梅花紅白是何先

梅花 紅白 是れ何れか先なる

(語釈)

○武藤國手：前出『松前藩家臣名簿』によれば、松前藩医武藤讓(篁齋)のことと思われる。本詩の後に挿入された詩から衡山居士とも号していたことがわかる。國手は名医の意。○二十春秋又六年：数え年で二十六歳。本詩は「癸卯」(天保十四年、一八四三年)の詩群に属するので、逆算すれば松濤の生年は文政元年(二八一八年)となる。

(通釈)

見聞も狭く、友も少なく、才覚にも乏しい。そのようなわたしですが、生まれてこのかた二十六年の歳月を(ここ松前で)過(すご)してきました。さて、この北国では、(花なども)生まれつき(開花の)時節を誤ることが多いものです。さて、梅の花は紅白いずれが先に花開くものでしょうか。

(参考詩) 酬松濤蟪君(松濤蟪君に酬ゆ)

衡山居士 讓

五十余年真愧癡

五十余年 真に癡なるを愧するは

梅花一事答君時

梅花の一事 君に答えし時

未知紅白何先後

未だ知らず 紅白 何れか先後なるを

只看南枝及北枝

只だ看よ 南枝及び北枝を

(語釈)

○酬松濤蟪君：年下の友人ではあつても、君主に連なる蟪崎家である松濤に対して敬意をこめた表現。しかし、二二六番詩と併せて友人同士の戯詠的な色彩を帯びている。松濤の詩ではないので参考詩とした。(通釈) 五十数年生きてきて本当に無知を恥ずかしく思うのは、梅花についての君の問いに答えられないときだね。紅梅白梅のどちらが先に咲くか実のところわたしも知らないのです。だからどうか南向きの枝と北向きの枝と交互にただ観察してみてください。

二二七番

仲春念七偶成(仲春念七、偶成)

庚

隔牆呼過壳魚声

牆を隔てて呼び過ぐ 魚を売る声

梅樹無花不聽鶯

梅樹 花無く 鶯も聴かず

二月東君多誤節

二月の東君 節を誤まること多く

未知何処動春情

未だ知らず 何れの処にか春情を動かすを

(語釈)

○念七：「念」は二十。仲春二十七日の作。○東君：春の神。

(通釈)

家の前を通り過ぎる魚売りの売り声が垣根越しに聞こえてくる。(今年春の春は)梅に花なく、鶯の声も聞こえない。(北地松前では)二月の春の神も時節を間違えることが多い。(春の神が)どの辺りで春の気を動かして(花を咲かせ)始めているか、まだ知るよしもないことだ。

二二八番 贈画工(画工に贈る)

歴遊遠踏松前境 歴遊 遠踏す 松前の境に
妙手姓名高似嶺 妙手の姓名 高きこと嶺に似たり
想見描成黒色新 想見す 黒色の新たなるを描き成すを
請君為写風流景 請う 君 為に風流の景を写せ

※韻が示されていないが、韻字の「境 嶺・景」は上声二十三「梗」韻。
本詩集において仄韻は珍しい。

(語釈)

○歴遊：ほうぼう歩き回る。○想見：想像してみる。
(通釈)

ほうぼう歩いて遠く松前の国境までやって来ました。先生の御高名は松前の山ほども高くていらつしやいます。わたしは先生が墨痕鮮やかに描く絵を想像してみるのが、どうかわたしのために風流な景色を写した一幅を描いてくださいませんかでしょうか。

二二九番 病中感懐(病中の感懐)

難報君恩身縦死 君恩に報い難く 身は縦い死すとも
対鶏不及万感生 鶏に対して及ばずして万感生ず
従来此地多文物 従来 此の地 文物多し
唯恐庸才承寵栄 唯だ恐る 庸才の寵栄を承くるを

※本詩も韻が示されていない。「生」「栄」は下平声八「庚」韻。七言詩は本来起句も韻を踏むべきだが、「死」は上声四「紙」で踏み落とされている。

(語釈)

○鶏：鶏は文・武・勇・仁・信の五徳を備えた君子として、理想の生き物とされる。韓嬰『韓詩外伝』巻二に、自分を評価してくれない魯の哀小に対して、家臣の田饒が主君のもとを去ろうとする際、次のよ

うに述べたことが記される。「君、独り夫の鶏を見ずや。首に冠を戴くは文なり。足距を搏つは武なり。敵前に在りて敢えて闘うは勇なり。食を得て相告ぐるは仁なり。夜を守りて時を失わざるは信なり。鶏に此の五徳あり」。○文物：ここでは学問・芸術のこと。

(通釈)

(病のために) 君恩に報いることのできない身だが、(この不徳の身では) このまま死んでも、わが働きは(五徳の持ち主と言われる) 毎朝鳴き声を聞かせるこの鶏にさえ及ぶまい。それを思うと万感心に迫るといふものだ。昔からここ松前は学問・芸術が盛んな土地柄(で人材も豊か)だが、そのようななかで、(わたしのとき) 凡才が主君からの恩寵を受けるとは、ひたすら畏れ多いことである。

二三〇番 重三(重三) 晩春十日徽典館宿題 真

豪遊会友百花津 豪遊 友と会す 百花の津
逸興臨流揮筆辰 逸興 流れに臨み 筆を揮いし辰
一詠一杯人尽醉 一詠一杯 人 尽く酔い
風流不讓永和春 風流 永和の春に譲らず

※本文の脇に起句の代案と思われる「豪遊好会百花津」(豪遊 好会 百花の津)という書付がある。

(語釈)

○重三：三月三日、上巳の節句。○一詠一杯：東晋永和九年(三三三年)三月三日、書聖王羲之が催した曲水の宴において、王羲之自身が参加者の詩作の序文として作り、みづから書にしたためた「蘭亭序」の一節「一觴一詠、亦以つて幽情を暢叙するに足る」を踏まえる。

(通釈)

上巳の宴を催して雅友たちと百花の咲く水辺に集まる。本日の興はまったく特別で、水の流れに臨むと、(流れてくる盃が通り過ぎるまでに) 筆を執つて詩を詠まなくてはならないが、いまがその時だ。一

首詠んでは一杯の盃を空け、全員が酔ってしまった。この風流さはその昔王羲之が催したという）永和の曲水の宴にも劣るものではないだろう。

二三二番 花下歩月（花下、月に歩む） 陽

賞心詩未就 賞心 詩 未だ就らず

踏月愛風光 月を踏みて風光を愛す

独楽花間径 独り楽しむ 花間の径に

輕風繞鼻香 輕風 鼻を繞りて香る

（語釈）

○賞心：景色を愛でる風流心。

（通釈）

（詩を詠みたい）風流心がふつふつと湧いてくるが、まだ佳句が思い浮かばない。月影を踏んで景色を愛でながら、ひとり花咲く小径を歩んでみる。するとそよ風が鼻をめぐって花の香りを運んできた。

二三三番 送別（送別） 陽

野店連牀幾斷腸 野店 牀を連ね 幾たびか腸を断つ

官途西望道程長 官途 西望すれば道程長し

勸杯更唱陽関曲 杯を勧め更に唱ふ 陽関の曲

別後先期寄數行 別後 先ず期せん 數行を寄するを

（語釈）

○西望：唐の都長安の西北にある渭城は、そこから西方シルクロードへ向かう出発点の街だったが、松濤は友との別れに臨んだ街はずれの居酒屋をその渭城にたとえる。王維の送別詩「元二の安西に使いするを送る」起句に「渭城の朝雨輕塵を浥し」とある。○陽関曲：前出王維詩の別称。その結句に「西のかた陽関を出づれば故人無からん」とある。

（通釈）

街はずれに長椅子を並べる田舎居酒屋で何度も盃を交わすが、君との別れの悲しみは断ち難い。君の官途もまだまだこれからだが、（官途に加えて、任地へと向かう）西への道のりも長いだろう。酒杯を勧めつつ、陽関曲を吟ずる。ここで別れることとなるが、任地へ着いたらまずこのわたしへ手紙をよこしてくれたまえ。

二三三番 廢寺看花（廢寺にて花を見る） 庚

殿荒寂寂少人行 殿荒れ 寂寂として 人の行くこと少なく

樹上喧喧頻鳥声 樹上 喧喧として 鳥声 頻りなり

只有殘碑千載在 只だ 殘碑の千載に在る有り

对花懷古更傷情 花に対して懷古すれば更に情を傷ましむ

（語釈）

○殘碑：壊れかけた石碑。

（通釈）

破れ寺の正殿は荒れ、人が訪れることも稀となつて寂寞としていた。境内にある木の上では、鳥だけがにぎやかに鳴き声を上げている。（在りし日の）寺を偲ばせるのはこれから千載も残るであろう壊れかけの石碑のみだ。加えて（いまも変わらぬ）花の姿に往時を思いやると、さらに感傷的な気持ちにさせられてしまう。

二三四番 春日山行（春日山行） 麻

遠上春山一徑斜 遠く春山に上れば一徑 斜めなり

炊煙起処認人家 炊煙 起くる処 人家を認む

賞心練句忘歸路 賞心 句を練りて歸路を忘る

前嶺後峯処処花 前嶺 後峯 処処の花

（語釈）

○遠上春山一徑斜 炊煙起処認人家：杜牧「山行」の「遠く寒山に上れば石徑斜めなり 白雲生ずる処人家有り」を踏まえる。

(通釈)

遠出して春山に登ると、一本の道が上に続いている。炊事の煙が立ち昇っているところに人家が見える。ふと風流心が沸き起り、思いついた詩句を推敲して歩いているうちに、つい帰り道を見失ってしまった。前も後ろも山に囲まれ、至る処花が咲いているその野辺で。

二三五番 春日帰家(春日、家に帰る) 魚

十歳辞家花発初 十歳 家を辞し 花 発初初め

昔時接木近何如 昔時 木を接ぎしは近ごろ何如

省親衣錦帰郷日 親を省い 錦を衣て 帰郷する日

兄弟歛筵旧草廬 兄弟 歛筵す 旧草廬

(語釈)

○歛筵：楽しい宴会。○草廬：草葺きの粗末な庵。自宅の謙称。

(通釈)

十年家を離れて過ごし、今春、花が咲き始める頃(帰省した)。在りし日に接ぎ木したあの春の花はいまどうなっているだろう。家族のことを思い、(出世して)よい身なりをして故郷に帰った日、兄弟が昔のままの粗末な実家で歓迎の宴を催してくれた。

二二六番 山居(山居) 元

卜居松樹下 居を卜す 松樹の下

高趣愛丘園 高趣 丘園を愛す

移石風流少 石を移して風流少なく

栽花春色繁 花を栽えて春色繁し

前池魚躍水 前池 魚 水に躍り

後嶺鳥翻軒 後嶺 鳥 軒に翻る

独楽山川勝 独り楽しむ 山川の勝

生涯避世喧 生涯避けん 世の喧しきを

(語釈)

○愛丘園：陶淵明「園田の居に帰る 五首 其の一」に「少きより俗に適するの韻無く 性 本より丘山を愛す」とある。本詩は陶淵明の隠逸精神を踏まえている。丘園は隠者の家の代名詞。

(通釈)

松の木の下に住まいを選び、隠者の趣味でしつらえる。(前庭には)山から好みの奇石をわずかに移しただけでそれほどの風流もないが、花は植えてあるので春の景色にはじゅうぶんだ。池には魚が躍り、後ろにある山から飛んできた野鳥も軒下を飛び回る。わたしはここでひとり自然の景勝を楽しむのだ。これからの人生、世間の煩わしさを避けてここで暮らすことにしよう。

二二七番 春日偶成(春日偶成) 元

遲日春光遍 遲日 春光遍く

新晴入菜園 新晴 菜園に入る

簾前蜂蝶静 簾前 蜂蝶静かにして

屋後燕鶯喧 屋後 燕鶯喧し

海暗遠山雨 海 暗くして 山雨遠く

花明近野村 花 明らかにして 野村近し

引筇移步処 筇を引きて歩を移す処

吟屐印苔痕 吟屐 苔に痕を印す

(語釈)

○遅日：春に日が長くなって日暮れが遅くなること。

(通釈)

日暮れも遅くなり、春の日が広く地上を照らすようになった。そこで雨が上がったばかりの菜園に向かう。(家と菜園を隔てる)簾のあたりには(雨上がりのため)蜂や蝶も飛んでいないが、軒の後ろでは燕や鶯の声が喧しい。(ここから見える)海辺はまだ暗い雲の下だが、雨をもたらした山辺の雲はもう遠くなっている。春の花は明るく咲き、

またここから田舎の村も近い。(村を訪ねに)杖をついて歩き出したら、
(雨に湿った) 苔には詩人の足跡が残った。

二三八番 御題 春日田家(春日田家) 先

尽日耕田瘦入肩 尽日 田を耕せば瘦せて肩に入るも

村翁唯喜太平年 村翁 唯だ喜ぶ 太平の年を

午陰茹飯無湯水 午陰 飯を茹にんとして湯水無きも

乞火隣家茶自煎 火を隣家に乞えば 茶 自ら煎おのずからる

(語釈)

○午陰：昼にできる木陰。

(通釈)

一日じゆう田畑を耕していると、その瘦せ肩に(鍬や鋤の重さが)こたえる。だが村の爺さんは平和に農作業でできることがただうれしいのだ。木陰の長さで昼時を知って飯を炊こうとするが、(火を着けていなかったので)お湯を沸かせない。だが、馴染みの隣家に火をもらいに行けば、そこには自然とお茶も沸いているというものだ。

二三九番 御題 三日水亭集(三日、水亭集) 真

気霽鶯吟桃李春 気霽れ 鶯吟ず 桃李の春

江亭会友賞佳辰 江亭に友と会し 佳辰を賞す

勝遊臨水歎無極 勝遊 水に臨みて 歎の極まる無く

高興一觴一詠新 高興 一觴一詠新たななり

(語釈)

○勝遊：心になう楽しい遊覧。○一觴一詠：二三〇番詩前出。

(通釈)

天気上がり、鶯がきれいな声で鳴き始めた桃李の咲く春。川の傍の四阿に友人と集まり、このよい時節を味わう。水辺での楽しい遊覧のときの喜びはこの上もなく、興に乗って盃を飲み干しては、(王羲之の曲水の宴に倣い)おのおの新たに一首を詠んだ。

二四〇番 御題 花下歩月(花下、月に歩む) 先

清景雲晴興杳然 清景 雲晴れて 興 杳然たり

千金難買雨余天 千金も買ひ難し 雨余の天

月升踏影花間径 月升起影を踏む 花間の径

樹底徘徊流水辺 樹底 徘徊す 流水の辺

(語釈)

○清景：月下の景色。○杳然：深遠である様子。

(通釈)

雲が去ったあと、月明りが見える夜の景色には奥深い趣がある。この雨上がりの空の美しさは千金でも贖えまい。月が昇って、わたしは花の間の小径を、月影を踏みながら歩む。そして木立の下、小川が流れる辺りを歩き回ってさらに余韻を味わった。

二四一番 贈武藤医生(武藤医生に贈る) 陽

起死靈丹肘後方 起死の靈丹 肘ちゅうご後方

藥炉煮石紫煙長 藥炉 石を煮て 紫煙長し

先生療却通神手 先生 通神の手もて療却す

真訣尽伝有錦囊 真訣 尽く伝はりて錦きんのう囊に有らん

(語釈)

○武藤医生：二二六番詩前出。○肘後方：晋の葛洪編の救急・日用の医術や処方をもとめた一書。○錦囊：錦で作った高級な袋のことだが、その価値からの連想で、医書には「錦囊〇〇」という書名ものが多い。

(通釈)

死者をも蘇らせる靈薬に葛洪の医書。また、薬を煎じる炉では薬石を煮て、炉からは紫色の煙がたなびいています。それらを用いて先生の神業をもつてすれば、(どんな病も)完治してしまいます。その医術の秘方は先生にすべて伝わり、錦の袋に入っているのでしょう。

(参考詩) 次韻奉酬囑君松濤(次韻して囑君松濤に酬い奉る) 武藤 讓

庸才濟世奈無方
奔走不知春昼長

庸才 世を濟うに方無きを奈んせん
奔走して知らず 春の昼の長きを

羨子風流公事暇
一年光景聚盈囊

子を羨む 風流にして 公事 暇あり
一年の光景 聚められて 囊に盈つるを

(語釈)

○次韻：別の詩人が作った詩の韻字(二二六番詩の場合は「方・長・囊」と同じ韻字を同じ順番に用いて詩を作り、元の詩や詩人に対して敬意を表すこと。ただし、松濤と讓は親しい友人同士であるため、ここでは敬意というよりも、揶揄や冗談の色彩を帯びている。二二六詩に付された詩と同様、松濤の詩ではないので参考詩とした。

(通釈)

わたしは凡才で、世の人々を病から救うにもその方法がないのだが、いったいどうしたらよかろうか(どうしようもない)。(毎日、患者を診て)奔走しているうちに春の日永にも気づかないでいた。それにしても君が羨ましい。(蠣崎家の)風流公子でしかも公務も暇ときている。それに一年の美しい光景を集めて(詩の題材を入れた)袋がもういっぱいになってきているのだろうか。

二四二番 馬(馬)

庚

宛西産出紫驪声

宛西に産出せる紫驪の声

壮志駆馳鞍上平

壮志 駆馳するも 鞍上 平らかなり

勢似流電日千里

勢は流電に似て 日に千里たり

追風駿骨四蹄輕

風を追う駿骨 四蹄 輕し

(語釈)

○馬：次の二四三番「松」もそうだが、物の名前を詩題としたいわゆる詠物詩である。その事物をいかに巧みに詠むかを競う。○宛西：漢代汗血馬の産地ならば西宛(大宛)だが、平仄の関係で字順を顛倒させたものか。○紫驪：黒味がかった栗毛の馬。「紫驪馬」は南朝以来の楽府題でもある。○駆馳：鞭を当てる馬の速度を上げる。○流電：

稻光。

(通釈)

西域フェルガナ地方に産する紫驪馬の嘶きが聞こえる。勇壮に鞭打つて疾駆させても、(姿勢が安定しているために)鞍に跨る乗り手は少しも揺れない。その勢いは稲妻にも似て一日に千里も走るといふ。風を追う紫驪の駿馬は四つ脚の蹄の音もまた軽やかである。

二四三番 松(松)

侵

亭亭百尺堪凌寒

亭亭たる百尺 寒を凌ぐに堪う

楚楚蒼蒼正森森

楚楚 蒼蒼 正に森森

唯有涛声後峯在

唯だ 涛声のみ後峯に在る有り

三冬不改歲寒心

三冬も改めず 歲寒の心

(語釈)

○亭亭：樹木などが高くまっすぐに聳える様。○楚楚：清らかで美しい様。○蒼蒼：青葉が青々と茂る様。○森森：樹木が高く聳え立つ様。樹木が生い茂る様。○三冬：一〇月十二月の冬の三カ月。○歲寒：松やコノテガシワが冬の寒さにも落葉しないように、君子が逆境にあっても節を守り通すことを言う。『論語』(子罕)に「歲寒くして然る後に、松柏の凋むに後るるを知るなり」とある。

(通釈)

まっすぐに百尺も伸びた松は冬の寒さを耐えしのぐ。清らかで美しい幹から伸びる枝には青々とした若葉を蓄えて生い茂り、(松の生えている)後方の山には、波の音だけが聞こえている。松は冬の寒さ敵しい三カ月間も(君子同様)節を曲げることがないのだ。

二四四番 春江晚釣(春江晚釣)

庚

柳岸維舟洗酒觥

柳岸に舟を維ぎて酒觥を洗い

春江日暮水紋平

春江 日暮れて 水紋平らかなり

漁翁不肯風光好

漁翁 肯んぜず 風光の好るしきを

万事無心独釣情 万事 無心にして独り釣る情あり

(語釈)

○酒觥：「觥」は本来兕牛(じぎゅう)の一角の牛、雌の犀とも言う)で作った酒器のことを言うが、ここでは酒杯ぐらいの意味であろう。

(通釈)

柳の岸に船を停めて(飲み終えた)酒杯を洗う。春の川に日が暮れて、(風いでいるため)水上の波紋も穏やかである。だが、漁師の爺さんはこのすばらしい風光にも心を動かさない。万事無心に釣りに集中するだけなのだ。

二四五番 春日閑居(春日閑居) 元

[A]

万木花開雨露恩 万木 花開くは雨露の恩

巧似風景小桃源 巧みに似たり 風景の小桃源

読書義洪南窓睡 書を読むも 義 洪にして南窓に睡り

驚夢泉水触石喧 夢を驚かす 泉水 石に触れて喧なるに

※同詩題で二首作られたと思われるので便宜的に「A」「B」とする。

(通釈)

春、すべての花が咲くのは雨露の恩沢によるものだ。その光景はあたかも小桃源郷のようだ。読んでいる書物の意味が難解でつい南向きの窓に寄りかかって居眠りしてしまう。その夢心地を勢いよく石にぶつかる泉の音によって覚まされてしまった。

[B]

万木花開雨露恩 万木 花開くは雨露の恩

韶光練句惱吟魂 韶光 句を練りて吟魂を悩ます

披書微倦安眠処 書を披くも微かに倦みて安眠する処

驚夢泉声触石喧 夢を驚かす 泉声 石に触れて喧なるに

(語釈)

○韶光：春のうららかな日の光。

(通釈)

春、すべての花が咲くのは雨露の恩沢によるものだ。うららかな春の陽光の下、詩句を練って頭を悩ませる。(よい詩語や典故を見つけようと)書物を開いてみるが、少し眠気に襲われ、うとうとしたそのとき、その夢心地を勢いよく石にぶつかる泉の音によって覚まされてしまった。

二四六番 詩題、詩韻ともに欠

秋天曠野列軍營 秋天 曠野に軍營を列せば

鴻雁驚飛雲上声 鴻雁 驚きて飛ぶ 雲上の声

勒馬已知森樹処 馬を勒せば已知り 森樹の処

胡人勿侮有奇兵 胡人の奇兵有るを侮る勿かれ

※韻字「營・声・兵」は下平声八「庚」韻

(語釈)

○勒馬：轡を引いて馬を留めること。○奇兵：奇襲を行う部隊。

(通釈)

秋空の下、広大な草原に大軍を並べる。(その威容に)驚いた白鳥や雁が飛び立ち雲の上でひと鳴きする。馬の轡を引くと、馬はすでに向こうの森の辺りに何か動きがあることに気づいたようだ。侮ってはならない。そこには匈奴の伏兵がいるにちがいないのだ。

二四七番 惜春(春を惜しむ) 晚春念五微典館宿題 尤

老鶯声洪有鳴鳩 老鶯 声洪りて鳴鳩有り

風掃芳枝景更幽 風 芳枝を掃い 景 更に幽なり

宿雨尤嫌春減却 宿雨の尤も嫌なるは春の減却すること

落花寂寂使人愁 落花 寂寂として 人をして愁えしむ

(語釈)

○声洪：春の終わりごろ、鶯の鳴き声がなめらかでなくなる。白居易「春末夏初、閑に江郭に遊ぶ 二首」の其一に「鶯声洪くして漸

く稀なり」とある。○鳴鳩：具体的にどんな鳥かは諸説あるが、本詩では夏の季語にもなっている「斑鳩」（イカル）を指すと考える。

(通釈)

春も終わりに近づきベテラン鶯の声の通りも悪くなり、(夏鳥である)斑鳩の声が聞こえてきた。風が花香る枝をひと払いすると、晩春の景はいっそう味わい深く感じられる。ただ前夜から続く雨のもっとも嫌なところは、そのような春の気配をすっかり消し去ってしまうことだ。寂しく散る花々にわが心もつい感傷的になる。

二四八番 春月(春月)

庚

楼上捲簾天一晴

楼上 簾を捲けば 天一晴

深更不寝覚詩情

深更 寝ねずして 詩情を覚む

恼人春色今宵景

人を悩ます春色 今宵の景

一刻千金月已傾

一刻 千金 月已に傾く

(語釈)

○天一晴：ここで「一」は「すべて、全体」の意。空全体が晴れわたっていること。○一刻千金：蘇軾「春夜」詩の「春宵一刻值千金」を踏まえる。

(通釈)

高殿のなかで簾を巻き上げると、晴れわたった夜空が広がっていた。そこで夜が更けても眠りにつかず詩に詠む題材を探した。今宵の景色ときたら春らしい詩情にあふれていてまったく悩ましい。一刻が千金にも値するような夜、月はすでに西に傾いていた。

二四九番 松前風土(松前風土)

晩春念八

虞

読曆已知過白駒

曆を讀みて已に知る 白駒過ぎしを

詩情未得費工夫

詩情 未だ工夫を費やすを得ず

吟身只訝梅花緩

吟身 只だ訝る 梅花の緩きを

三月清香此地無

三月の清香 此の地に無し

(語釈)

○晩春念八：三月二十八日。○過白駒：月日の過ぎるのが早いことを言う。『莊子』(知北遊)に「人生、天地の間、白駒の卻を過ぐるがごとし。忽然たるのみ」とある。○詩情：詩を詠みたくなる心。○費工夫：口語的表現で、時間や労力をかけること。

(通釈)

曆を見たらもう時が進んで晩春も終わりそうな時節になっていることに気づいた。ところが私の詩心はどうも詩作に向けられそうもない。詩人としては、梅の花がまだ咲かないのを訝るばかりだ。なにせ三月の梅の清々しい香りは、ここ松前には届いていないのだから。

(函館工業高等専門学校)